ダッカでリキシャレースを開催して

映画監督　セシリア 亜美 北島*

なぜバングラデシュ・ダッカでリキシャレースを開催したのか?
(第1回目開催までの過程)

私は2011年、はじめてバングラデシュのダッカを訪れました。実はアジアの番組シリーズを作ろうとやってきたのでした。しかし、直後、日本では東北大震災が起こり、番組どころではない状況になりました。それから一年後。人口が多く交通渋滞の激しいダッカで懸命に生きる人々の姿にいたく感動した私は、このダッカで何か実現できないかと考え続けていました。そこでひときわ鮮やかに走るリキシャの起源が、実は日本の人力車から来ていること、そしてリキシャは人々の足という役割だけでなく、一つのアートになっていることに驚きました。閃いたのはその時でした。「リキシャレース」をダッカで開催できないかと。そしてこれを映画にしたいと思い立ちました。しかし、そもそもこのすごい交通渋滞の中でのレース開催は容易なことではないことは想像していました。もちろん、資金も手だても何もありませんでした。その後、在日本バングラデシュ大使館を訪れ、大使には背中を大きく押されました。そして、イベントの開催を実現すべく、2回、3回とダッカを訪れることになったのです。JETRO、JICAバングラデシュ事務所、在バングラデシュ日本大使館にも訪れました。面白いアイディアだと感触は良かったのです。やがて、現地JICAが共催を名乗り出てくださったのです。観光大臣や商業大臣をはじめとする政府関係者、さらにはダッカ警察署長や国会議長、ダッカ市長にもお会いし、協力を依頼しました。4回目に訪れたときは、本格的なイベントの準備に入っていました。周囲はハルタルなどの政治抗争の最中で、リキシャレース開催を懐疑的に見ていて、最後の最後までレース開催が危ぶまれる状況でした。しかし、多くの学生やバングラデシュ・スカウト、終いにはバングラデシュ・オリンピック実行委員会など多くの方々の協力を得ることができました。このイベントの目的は、バングラデシュの魅力を知ってもらい、投資や観光を呼び込み、『Promote Bangladesh』を掲げることでした。Dhaka Rickshaw Fiesta Weekと銘打ち、リキシャアート展示会の他、物産展や音楽演奏会などを併設しました。そして第一回目の記念すべきリキシャレースは、3月15日に行われ、多くのメディアにも取り上げられる程になりました。その記録をドキュメンタリー『リキシャレースにかける夢』に収めることができました。

その映画はJECK主催により2014年2月のよこはま国際フォーラム2014でも上映の機会を頂きました。経済格差の激しいバングラではその日暮らしを強いられ「夢など考えたことがない」と半ば人生に諦めかけていたリキシャワラ(リキシャドライバー)たちが、この時「リキシャを購入したい」「野菜売りをはじめたい」「小さなカフェを開きたい」など口々に夢を語り始めたことは私たちの大きな成果だと思っています。昨今、都心には立派なモールも立ち並び、中産階級も増えましたが、底辺で働く人たちは取り残されています。このような人たちのもつ底力にモチベーションの火がつけば、国は大きく発展していくに違いないのです。単に「貧しい人への支援」という形ではなく、どんな立場の人でも一緒に参加でき、一丸となってイベントを作り上げるところが、今までのやり方と違うところです。「今まで下の階層の人として見ていたが、彼らをもっと尊重しよう」「町をきれいにしよう」「彼らがダッカの経済を下支えしているのだ」「アートなどバングラの良さをもっと世界にPRしよう」人々の"めざめ"(意識改革)のはじまりです。

リキシャレースは続けられるのか?
第2回目開催で生まれたこととは?

「小さくてもいいから続けてこそ意味がある」などさまざまな周囲のご意見をいただきながら、私たちは第2回目の開催に向けて準備を進めて行きました。前年はJOCV40周年記念のイベントがあったためにJICAバングラデシュより資金的な援助も頂きましたが、今年はそれが叶わず、覚悟して多くのスポンサーを回りました。現地のマスコミ報道もあって、各社の反応はとても良いものでしたが、いざお金を出す段階になると企業も躊躇しました。そのため、急遽リキシャワラへの賞金を半分にする事態に追い込まれました。それでも、競技参加希望者は倍増しました。今年はバングラデシュで在勤中の日本人たちがチームを組んでレースに参加をして下さり会場を湧かせたのです。一方、今年もリキシャアート展示会の他、物産展も開催。この物産展ではバングラデシュの産物を展示するようにしました。ジュートや皮の他、果物や野菜、魚もたくさん取れますが、十分な加工技術がありません。それこそ、日本の大手企業だけでなく地方などの中小企業にとってはチャンスなのです。商業省でも日本の一村一品の考えを取り入れようとしていて、さまざまな産物や手工芸品のレベルを向上すべく力を入れています。地方でもそうした工場がもっとできれば、リキシャワラたちもわざわざダッカで出稼ぎにやって来なくてもいいのです。日本が一村一品で地方が活性化したようにバングラでも地方の雇用創出が求められていると実感しました。

リキシャイベントの存続とこれから

「継続は力なり」という言葉はあります。現実はそんなに生易しいものではないと実感しています。それでも多くのサポーターを100人、1000人、何万人と増やすことこそ大きな力になると信じています。バングラとご縁のある方もない方も一緒に応援してくださるようにグッズもつくるようになりました。Tシャツやキャップの他これからもさまざまなアイテムを増やしていき、サイトdhakarickshaw.stores.jpでも販売しています。Made in Bangladeshの威力を実感してください。またお買い上げいただいた金額はイベント運営やリキシャワラへの賞金(未来)となります。ぜひあなたもサポーター仲間になってください。ダッカの勢いに乗せて乗せられ、「生きる」ことの原点を実感して頂ければ幸いです。

-リキシャイベントがダッカ恒例の一大行事になることを夢みながら-

リキシャ・レース

*せしりあ・あみ・きたじま　アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ。日本国籍。助監督、スクリプターを経て短編『その手をください』を制作。主要作品『すぐそばにいたTOMODACHI～The Neighbourly TOMODACHI』(2011)、『リキシャレースで広がる輪』、『瀬戸内トリエンナーレ2013 バングラデシュ・プロジェクト 川の国からのメッセージ』他。